

親鸞からみたコーランの思想

——イスラームということと帰命ということ——

狐 野 利 久

序

トーマス・カーライルは、「英雄崇拜論」の第二講で、「予言者としての英雄 (The Hero as Prophet)」と題してムハンマドについて述べている。これは一八四〇年五月八日、ロンドンの紳士淑女を前にしておこなった講演といわれているが、そのなかで、彼は、

「我々の誰かがマホメット教徒になるという危険性はないから、私は当を失しない限り、極力彼の美点をかたるつもりである」 (……as there is no danger of our becoming, any of us, Mahometans, I mean to say all the good of him I justly can.)⁽¹⁾

と言つて話を進めているのである。ところがそれからおよそ百五

十年たった今日、ロンドンには巨大なモスクが建ち、多数のムスリム達はそのモスクに集まっているのには驚くことである。しかしながら、又、およそ百五十年前のロンドンの人達が、自分達の周りにムスリムが現出する事はないと思ひながらも、彼らのキリスト教と、いわば、兄弟宗教であるイスラームの宗教を理解しようとしていたことに敬意を表したのである。当時の英国の事情からすれば、それは当然のことであつたかもしれないが、今日の日本は経済大国と言われるようになったがために、当時の英国と似たような立場に立たされている。そしてマスメディアの発達によつて、イスラームの国々が身近になつてきているだけに、「当を失しない限り」イスラームの宗教を理解する必要がある、今こそあるように思うのである。

私はイスラームの宗教を端的に言い表す言葉として、コーラン

の、

アッラー (Allah) の御目よりすれば、真の宗教はただ一つ
イスラーム (Islam) あるのみ。(三・一七)³⁾

という言葉を挙げる者であるが、「イスラームあるのみ」と言われても、イスラームする仕方においては、内向的な人とそうでない人とで異なる訳で、異なれば、ドグマも異なってくるから、既存のドグマにとらわれないで、日本人の立場でコーランの思想と親鸞のそれとを比較することとし、「親鸞からみたコーランの思想」という題にした。更に、イスラームということと帰命ということとを主に考察することによって、共通の場を明らかにしようとするものである。

一

コーランによれば、アッラーは「天を司り地を司り、万有を司り給う御神」(四五・三五)であるから、

アッラー、そのほかには絶対に神はいない。必ず必ず汝らを復活の日に喚び集め給うであらう。ゆめ疑うまいぞ。アッラーの御言より確かな言葉を誰が言おう。(四・八九)

とあるように、唯一絶対の支配者である。そうして、

おお人々よ、汝らの主につかえまつれ。汝らを創り、また汝らより先の代の人々を創り給うた汝らの主に。さすればおそらく汝ら神を畏れる者ともなるであらうに。(二・二〇)

ここで「汝らの主につかえまつれ」とは「お前たちの主(rabb)に奴隷(abd)としてつかえよ」ということであるから、忠実に主人の命令を守り、主人の心を心として行動せよということである。忠実なる僕は、それ故、絶対無力なる者であり、自分自身の一番大事なものの、親鸞的に言えば、雑行雑種自力の心を投げ捨てて、アッラーにすべてをまかせる者でなければならぬ。それがコーランで言うところの「イスラームあるのみ」という在り方に他ならないのである。

このことを親鸞において考えてみれば、教行信証の「行の巻」で、

南無と言うは、即ち帰命なり。またこれ発願廻向の義なり。という善導大師の言葉を親鸞は引用し、更にその言葉を解釈して、

帰命は本願召喚の勅命なり。発願廻向と言うは、如来す

で、に発願して、衆生の行を廻したまうの心なり。

と言っているのであるが、ここで彼が言うところの本願召喚の勅命とは、正しく「イスラームあるのみ」という言葉に相当すると考える。なぜなら、親鸞の言う本願召喚の勅命とは、私達に声をあげて喚びかけている弥陀の本願は私達が従って行かねばならない勅命、即ち絶対的、至上命令であるということなのであって、親鸞の、いわば、阿弥陀仏に対する絶対的帰依を表す表現であるからである。従って、

阿弥陀仏の御目からすれば、真の宗教はただ一つイスラーム

みあるのみ。

とか、或は

アッラーの御目からすれば、真の宗教はただ一つ本願召喚の勅命あるのみ。

と言ひ替へても、決して本質的には誤りにはならないであろう。

なぜなら、コーランに、

聖典を授かつておる人々にも、そうでない普通の人々にも、「お前たち、すべてを神様におまかせしたか」と問うて見よ。それでもしすべてをおまかせしたというなら、もうそれだけでその人たちは立派に（信仰の道に）入っている。

（三・一九）

と言う言葉があるからである。

二

ところで、アッラーは人格神であるが阿弥陀仏は人格神ではないという考えがあるようである。例えばキリスト教徒の遠藤周作氏も

史的イエスというのは実在する。しかし、史的阿弥陀如来というものは考えられない。そうすると、人格神としてあたかも生きているもののごとく絶対帰依できる気持ちには、どこからおきるのだということを探ねるのですが、あまり要を得た返事をされないのです。

と、井筒博士との対談で疑念を投げ、そして又、井筒博士も、

生きた人格神であればこそ人間は己のすべてを挙げてそれに帰依することができる。理念的な神にたいしての絶対帰依⁽⁴⁾ということとは、宗教的には考えられないとおもいます。

と答えているが、浄土真宗の信者が阿弥陀仏を「親さま」とか「御親」、或は「阿弥陀さん」とかという言葉で呼んでいることから解るように、阿弥陀仏の広大な慈悲に包まれている自分を発見すれば、単なる理念としか思えない阿弥陀仏が人格神となつて顕現してくるのである。親鸞自身、善導大師の「散善義」にある次の言葉、

「深心」と言うは、即ちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには決定して深く、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、憶劫より已来、常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず。二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を攝取して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。

という機の深信と法の深信の、いわゆる二種深信を教行信証の「信の巻」に引用して、「念仏の衆生をみなわし攝取して捨てず」という阿弥陀仏に対する絶対的な帰依、即ちイスラームということ、帰命ということが可能であることを教えているからである。従つて二種深信によつて、大悲無倦常照我ということが本當にその通りでありますと親鸞に共鳴できれば、理念としての阿弥陀

陀仏は親様とか、阿弥陀さんとかと呼べる人格神になってくるのである。

ところがアッラーの場合は、前述の如く、唯一絶対なる神であり、

我らは人間を創造した者。人の魂がどんなことをささやいているかすっかり知っている。我らは人間各自の頸の血管よりもっとちかい。(五〇・一五)

ということであるから、ムスリムは、神と直接向い合い、神から常に見られている「私」という立場に立たされている。しかも、

元来アッラーは、あまりいい気になりすぎて、つけ上がるような者はお好きでない。(五七・二四)

ということ、ムスリムは、恐ろしい復讐者、審判者としてのアッラーを意識し、畏れていなければならないのである。従って親鸞の場合は、善導の二種深信の教えによって、機の深信の自覚に立つ時、阿弥陀仏の広大なる慈悲が親鸞自身の上にあった——法の深信——ことを喜んだのに対して、コーランの教えでは「神を畏れる者」がイスラームする者であり、神に仕える者ということになるのである。

三

コーランのそれぞれの章が

慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において……

という言葉で始まっていることから解るように、アッラーは慈愛あまねき (rahman)、慈悲ふかき (rahim) 神なのである。コーランに、

なお、お前たちの頭上には七層の (天) を創造した。我らは決していたずらに (万物を) 創造したのではない。(二三・

一七

という言葉がある。アッラーは「いたずらに万物を創造した」のではなく、コーランの、例えば一六・五—八、一〇、だとか、三一・九—一〇に述べられているように、我々人間のために、人間が生きて行けるようにという目的をもって、万物を創造したということである。しかもアッラーによる創造は我々人間が終末を迎えるその日まで続くということである。このようにして創造されたものは、いわば、アッラーの意志の現れであるから、コーランでは「徴 (آية) 」とか、神兆と呼ばれている。従って、太陽、空気、水、雨、草、木、動物、鳥等、我々の周りに存在する一切のものが、私という一人の人間を生かそうとする神の徴であり、神のお慈悲であるから、「考えてみれば、神様はまことに気のおやさしい、慈悲ふかいお方 (一六・七)」ということになる。これがラフマーンということである。親鸞の場合は、神の創造ということは言わないが、阿弥陀仏を無量寿如来と訳す時、「無量寿」とは「私を生かそうとする数限りない (即ち、無量の) いのち (寿)」ということであり、「如来」とは「如から私のところに来

る」働きということであるから、無量の命の働きということである。善導大師が「散善義」で、「阿弥陀仏というはその行なり」と言っているのはそういうことなのであって、太陽、空気、水、雨、草、木、動物、鳥等、一切のものが私を生かそうとする無量寿の現れであるから、それ故、阿弥陀仏の徴と言えるはずである。アッラーがこのような無償の慈悲、ラフマーンの心でもって創造したものは、人間が生きていくための「物」であるのに対して、親鸞の場合は、「物」ではなく、私を生かす「命」として一切のものを拝んでいるということが、例えば「歎異抄」の

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなり。

から判断されるから、両者の間には微妙な違いもあるのである。

アッラーのラヒームについていえば、ラヒームとは差別的慈悲と井筒博士も言っているが、例えば、最愛の肉親を亡くして「神も仏もあるものか」と言って嘆き悲しんでいる人が、もしも最愛の肉親を亡くしたということが縁となって宗教に目覚めることにでもなれば、最愛の肉親を亡くしたということが、神のラヒームであるということである。つまり、人間の側における状況なり条件に応じて与えられる神の慈悲のことであって、賞罰応報主義もこれに入るであろう。阿弥陀仏にはそのようなラヒームに相当する属性はない。むしろ、わが身の「業」（又は「宿業」として受けて立つ心になった時、阿弥陀の慈悲を感ずるといえるものである。

なぜなら親鸞は

されば束縛の業を持ちける身にてありけるを、助けんと思召したちける弥陀の本願のかたじけなきよ。
と「歎異抄」で言っているからである。

四

そのようなアッラー（乃至阿弥陀仏）にイスラームすることと、ことを更に考察してみよう。親鸞は善導大師の「言南無者」という言葉を解釈して「帰命は本願召喚の勅命なり」と言ったことは既に述べたが、それに続けて彼は「発願廻向と言うは、如来すでに発願して、衆生の行を廻施したまうの心なり」と言っていることに注目したい。なぜなら、阿弥陀仏に帰命せよというのは阿弥陀仏の勅命なのであるが、その実、阿弥陀仏の方からの廻向によって、私という人間は阿弥陀仏に既に帰命する心になっているというのであるからである。そのことを彼は「行の巻」で次のようにも言っている。

明らかに知りぬ。これ凡聖自力の行にあらず。かるがゆえに不廻向の行と名づくるなり。大小の聖人、重軽の罪人、みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし。

つまり、帰命するということは、凡聖自力の行では出来ないことだと言っているのである。「帰命せよ」という本願召喚の勅命は二種深信によって目覚めたならば、もはや阿弥陀仏に帰命しなさいと

いう阿弥陀仏の命令ではなく、阿弥陀仏という「法」の働きによって、その「法」と一体となっている「機」としての、「帰命する」自分が見いだされているということなのである。八木誠一氏が

「たとえば、モーゼの十戒ですね。「殺すなかれ」という言葉にしても、あれは命令法ではなく、直接法の未完了ですね。「お前は殺さない」という意味ですね。……道元は「正法眼藏」の中で「諸惡莫作」ということを言っているのです。これは諸々の悪をしてはいけないというのじゃなくて、目覚めた人間は悪いことはしないんだということですね。……」⁽⁶⁾と言っているが、親鸞の場合も同じように、阿弥陀仏の「不廻向の行」に目覚めておれば、帰命せよは帰命していることなのである。ところでコーランではその辺をどのように説明しているだろうか。

お前（ムハンマドのこと）気がつかなかったか、自分の手で自分をきよめようとしている連中のことを。否々、ただ、アッラーのも、御心のままに人を浄め給う。誰ひとり、椰子糸一本ほども不当な扱いをされることはなからうぞ。（四・五二）

この「御心のままに人を浄め給う」という点に、「凡聖自力の行にあらず。かるがゆえに不廻向の行と名づく」と親鸞が言っているのと同じアッラーの「衆生の行を廻施したまうの心」がある

と思うのである。このようなアッラーの「御心のままに人を浄め給う」働きによって忠実な奴隷になっている人のことがコーランの二五・六四―七一に見られる。特に、

しかし、改悛のまことを示し、信仰にはいり、善行に精出す者だけのぞく。こういう人々についてはアッラーが、犯した悪事を全部そっくり善行に替えてくださる。……それに、改悛のまことを示して善行に精出す者は、たしかに本気でアッラーに後悔しあやまっておるのだ。（二五・七〇―七二）

という言葉に、犯した悪事の数々を、「凡聖自力の行」によって全部善行に替えようとしても、それは不可能であって、むしろ、「機の深信」とも言うべき「改悛のまことを示」すことが先決であることが示され、そうすることによって、「御心のままに人を浄め給う」アッラーのお慈悲が「法の深信」として働くから、「善行に精出す」ことが出来るということが明らかにされているのである。

結 び

以上コーランに説かれているイスラームということと、親鸞の帰命ということを中心にして、共通の場となる点を考察してきた。ところで、イスラームすること或は、帰命することが、我々人間が生きている上においてどういう意味をもっているのであらうか。結論として言えることは、無我の生き方を教えているとい

うことであらう。カーライルは「英雄崇拜論」の中で次のように言っている。

キリスト教も、何よりも神に身を委ねることを我々に命じている。我々は血肉と協議してはならないし、無駄なあら捜しや無駄な悲哀願望に耳をかはしてはならない。……回教にもそれなりの自我の否定、自我の滅却がある。これが天が我の地上に啓示した最高の教智である。(Christianity also commands us, before all, to be resigned to God. We are to take no counsel with flesh-and-blood; give ear to no vain cavils, vain sorrows and wishes: ……Islam means in its way Denial of Self, Annihilation of Self. This is yet the highest Wisdom that Heaven has revealed to our Earth.)⁽⁷⁾カーライルのいう人間の最高の教智を、親鸞の帰命というところによって体得した近代人として、いみじくも「如来の奴隷となれ」と言った清沢満之を挙げることができよう。彼は「精神主義」の中で、

請う勿れ、求むる勿れ、爾、何の不足がある。もし不足ありと思わば、是爾の不信にあらずや。如来は爾のために必要なるものを、爾に賦与したるにあらずや。もし其の賦与において不十分なるも、爾は決して此れ以外に満足を得ること能わざるにあらずや。

と述べているが、如来(又はアラー)によって必要なものを賦

与されて、生かされて生きている我々なのだから、何ら請うことも求めることも必要ないことなのであって、「もし不足ありと思わば是爾の不信にあらずや」ということで、イスラームしていない、或は帰命していないことになってしまふのである。カーライルは、

本當にこれこそ世に知られた唯一の眞の道德である。あらゆる皮相の法則、一時的外觀、損得の計算を無視して、この深遠なる宇宙の法則と正に一つになるの時、人は正義にして無敵、有徳にして確実なる征服への途にあるのである。この偉大なる、宇宙の中心的法則に協力する時、人は勝利を得るし、そうでなければ、勝利は得られないのだ。(I say, this is yet the only true morality known. A man is right and invincible, virtuous and on the road towards sure conquest, precisely while he joins himself to the great deep Law of the World, in spite of all superficial laws, temporary appearances, profit-and-loss calculations; he is victorious while he cooperates with that great central Law, not victorious otherwise.)⁽⁸⁾

と言っている。勝利を得た人とは、親鸞的にいえば、無礙人のことであらう。従って、自我を否定してイスラームすること、或は雑行雑種の自力の心を投げ捨てて帰命すること、ここに無礙人としての人間の在るべき姿、カーライルのいへば、勝

利を得た人間の真の姿があることをコーランも親鸞も教えているのである。

- (1) Thomas Carlyle: *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History*, p. 43, London Chapman and Hall.
- (2) 小池滋著「島国の世紀」序章、文芸春秋社。
- (3) 引用したコーランの訳は井筒俊彦訳(岩波文庫)を用いた。
- (4) 井筒俊彦対談集「叡智の台座」二五―二六頁。
- (5) 井筒俊彦著「コーランを読む」九二頁、岩波書店。
- (6) 八木誠一編「キリスト教の根拠と本質」四四頁、理想社。
- (7) Thomas Carlyle: *On Heroes*, p. 57.
- (8) *Ibid.*, p. 56.

(こゝ・りきゅう、英文学、室蘭工業大学教授)